

さて今年のセ・リーグ覇者は？(Part 2)

(Revised version)

再度統計分析を試みてみました

セ・パ交流戦が終わった時点でスポーツ新聞から得た 6/15 現在のデータ(下表)を用いて手計算による簡易相関分析を再度試みてみました。チーム順位が 4/13 時点と比べると、巨人と広島が 1 位、中日が 3 位落とした反面で、ヤクルトが 3 位、阪神が 2 位上昇しているところが注目されるのですが、簡易相関分析の結果によるとどうなることやら。

チーム順位	打率	本塁打	得点	失点	防御率	犠打飛	盗塁	失策
1. ヤクルト	.241(3 位)	64(2 位)	244(2 位)	195(2 位)	2.73(2 位)	51(4 位)	39(2 位)	27(1 位)
2. 巨人	.241(3 位)	68(1 位)	250(1 位)	272(6 位)	3.58(4 位)	42(6 位)	33(3 位)	42(6 位)
3. 広島	.249(2 位)	25(6 位)	235(3 位)	227(3 位)	3.32(3 位)	71(1 位)	19(6 位)	30(2 位)
4. 阪神	.232(6 位)	45(3 位)	206(4 位)	185(1 位)	2.65(1 位)	60(2 位)	48(1 位)	31(4 位)
5. DeNA	.250(1 位)	43(4 位)	198(5 位)	243(5 位)	3.75(6 位)	50(5 位)	21(4 位)	30(2 位)
6. 中日	.241(3 位)	35(5 位)	188(6 位)	236(4 位)	3.68(5 位)	52(3 位)	20(5 位)	31(4 位)

「攻め」と「守り」のバランスが取れたヤクルトが首位に躍進

簡易順位相関分析によると、チーム順位と相関係数が最も高いのはやはり「得点」で、チーム順位の変動も「得点」順位の変動とリンクしているようです(ヤクルト+1、巨人-1、広島-2、阪神+2、DeNA±0、中日-2)。しかし、「得点」の要因となる「打率」が 4/13 時点ではチーム順位との相関係数が高かったのですが、今回は相関係数を大きく下げしており、項目別相関係数 2 位の座を「本塁打」に譲っている形です。「打率」の面では首位と最下位の差が 4/13 時点の.031(1 位 広島.259 - 5 位 ヤクルト&阪神.228)から.018(1 位 DeNA .250 - 6 位 阪神 .232)に縮小し平準化した傾向が見えます。順位相関係数が「本塁打」と同程度に高かったのは「失策」と「失点」で、4/13 時点でチーム順位 4 位だったヤクルトが首位に進出してきたのも、“攻め”の要素である「得点」、「本塁打」ばかりでなく、“守り”の要素である「失策」と「失点」(ともに少なさ)でも 2 位の好位置を占めているからだということができると思います。

ヤクルトの“守りの野球”の陰に見える監督・コーチ陣の奮戦ぶり

Web11 4/16 発の前稿「さて今年のセ・リーグ覇者は？」の末尾の「私の一押しは高橋奎二投手」の項目に私は「4/10 に 120 球の熱投でプロ 7 年目で巨人戦初勝利を挙げたのをテレビ観戦しましたがなかなかの傑物だとお見受けしました。この人の活躍が起動力となって“守りの野球”を強化できるかどうかヤクルトの 2 連覇の鍵ではないかと思っています。」と書いています。その後も好成績で、勝利数もヤクルトでただ一人投手成績 10 傑に入っている(3 位)の小川泰弘の 4 勝(3 敗)を上回る 5 勝(1 敗)の勝ち頭のようなようですから、間違いなくヤクルト投手陣の一角を担っているのでしょうね今や。投手陣の方には、「本塁打」数、「打点」、「出塁率」とも 1 位の 村上宗隆や「盗塁数」1 位塩見泰隆のような個人的な 1 位の選手はいませんが、「セーブ」数 2 位のスコット・マフガフを含めた各投手の総合力を発揮するための起用法に長けた高津臣吾監督やピッチングコーチの皆さんの奮闘ぶりが目に見えるような気がします。

阪神の躍進も守りの野球の強化から

一方、4/13 時点では断然のピリで、最下位脱出はとて無理だと思われていた阪神が、4 位にランクアップしたことも特筆事項だと思います。こちらは、「打率」(6 位→5 位)、「本塁打」(4 位→3 位)、「得点」(6 位→4 位)と“攻め”の要素が少しずつ順位アップしたこともあります。なんとと言っても、いずれも 6 位であった“守り”の要素の「防御率」と「失策(の少なさ)」がともに 1 位になっこのている点が光っており、ここに阪神の順位向上の鍵があったと見るができそうです。中でも、青柳晃洋と西勇輝が投手成績 10 傑の 1 位と 2 位を占め、規定回数未達ながらジョー・ガンケルが投手成績 10 傑の 4 位に当たる 2.32 の防御率を示し、それぞれが 7 勝、4 勝、3 勝をあげているのですから大変なものです。しかし、この青柳晃洋が初白星を挙げたのがなんと 4 月 22 日のことだったんですよ。開幕以来の 9 連敗(3/25-4/3)、その後の黒星まみれの時期にどうして青柳晃洋を起用しなかったのか」と怒りたくなくなりましたよ。

どう考えているのか阪神の首脳陣の選手育成策

西勇輝の遠縁にあたるという西純矢投手も、5 月 1 日の巨人戦で見事な投球を見せシーズン初勝利を挙げたんですよ。ヤクルトの高橋奎二投手と同じように「この人の活躍が起動力となって“守りの野球”を強化できるかどうか今後の阪神の鍵」と書こうと思っていたのですが、その後あまり登板機会に恵まれていないようですね。「使われてこそ力が伸びる」という側面があると思うのですが阪神の首脳陣はどう考えているんでしょうね。少し前に大相撲の小錦さんが「部屋別稽古ばかりでは実力が付かない」と言われていました。今年のオフに藤浪晋太郎投手が巨人の菅野智之投手の合宿に参加したのも、大相撲の部屋別稽古と同然の凡庸なチーム内練習だけでは成長が望めないと思ったからに違いありません。しかし、バランス重視型の菅野智之が剛球投手の藤浪晋太郎に見本を示せるわけがありません。かこの世界の王貞治さえ、荒川博コーチの提案した一本足打法があったからこそ成長できたのです。すぐにでも特別なコーチ体制を整えなければ藤浪晋太郎は宝の持ち腐れの形で野球生活を終える形になってしまいそうです。

どうなっているかなあ 2 か月後には医

広島がチーム順位を 2 位から 3 位に下げたのは、この 2 か月間の間に、攻撃力の要因の「打率」の順位が 1 位から 2 位に下がったのに伴って「得点」が 1 位から 3 位に下がったこともありますが、何よりも守備力の要因である「防御率」と「失点」がともに 1 位から 3 位にダウンしたことによるものと思われます。一方、巨人は「打率」2 位から 3 位に後退したものの、「本塁打」が以前 1 位を保ち「得点」が 2 位から 1 位に上昇して攻撃力要素については文句の付け所がないようなのですが、「防御率」が 3 位から 4 位、「失策」が 4 位から 6 位に転落することによって「失点」が 5 位から 6 位にダウンしたために、チーム順位が 1 位から 2 位にダウンしたのもと思われます。投手成績 10 傑 9 位戸郷翔征が 7 勝、規定投球回数未達ながら投手成績 10 傑 4 位相当の防御率の 2.25 の C.C.メルセデスが 5 勝、同じく投手成績 10 傑 8 位相当の防御率の 2.77 の菅野智之が 6 勝を挙げているのですから、勝ち組投手が 3 枚揃って、一昔の 3 日おき先発登板の時代だったら連戦連勝間違いなしなのですが、現今の 5 日おき先発登板全盛の時代にはそうはいきません。C.C.メルセデスに次いでマット・シューメーカーやらマシュー・リー・アンドリースやらの、いずれも“大リーグ上がりにとはとても見えない”外国人投手で場つなぎしているようですがどうなることやら。

当方単純なアンチ巨人派ですから、巨人以外の球団ならどこが優勝しても構わないのですが、果たして今年のセ・リーグの覇者となってくれるのをしっかりと頼めそうなのはヤクルトなのか広島なのか、それとも阪神なのか。DeNA と中日は優勝圏外に去ったと思われるのですが、奇跡の逆転というものはありません。いずれにしても、日々のTV 野球観戦を楽しみながら、2 か月後に「さて今年のセ・リーグ覇者は？(Part 3)」を占うために、3 回目の簡易相関分析を試せる日を心待ちにしています。